ドイツ語の発音

ウィルウェーバー・エン

外国語を話すことは日本人にとって大変むずかしい。単語に外国語との関連性がないこと，構文や発音の相違から考えてもそうであるし，更に民族性から来る思想の違い等も大きい。ドイツ語もこの例にもれない。然し注意すべき要点を把握すれば或程度これを克服することができる。その一つに発音がある。

ラテン語のような死語と異って，現在その言葉が話されている限り，あまり変な感じを与える発音をしていては，或種の許容の気持を相手に抱かせて付き合うことになる。又一方自分自身はいつもコンプレックスを払い落とすことができない。文章を読む時文字につれて，それを発音する口や舌の動きも無意識の中に味わっている。

一番目立つのはnとℓの発音である。nはかな文字のンに大体相当すると誰しも内心感じている。ところでこのンは，尊王，反応，観音様のように尊，反，観のnが次の母音と結合してナ行の発音になる時がある。一方では満員，原因，半音のようにリエゾンしないで，あたかもフランス語の un や en 等のように舌面が上あごにふれずに，音が鼻へ抜ける場合があって，このように使い分けをしている。これを逆にドイツ人に言わせると，マンニン（満員），ゲンニン（原因），ハンノン（半音）に近い発音をする。英語もそうであるが，ドイツ語のnは必らず舌の上面が上あごにつく。電話等で念を押したり，又は，はっきり言おうとすると，特に語尾のnを長くひびかせるのでよく分る。例えば Ja, ich-werde kommen——n，と舌の上面を上あごにつけたままメン——ン，と長くひっぱる。

sの前のnには特に気をつけないとnの正しい発音をしないで終り，舌足らずのドイツ語に聞える。例えば gans, Fenster は，ガンス，フェンスターではなくて，ガンツ，フェンツターに近く聞える。英語でも同様で，プリンス，プリンセス，ダンスではなくて，プリンツ，プリンツェス，ダンツに近く発音される。nの発音では舌の上面は上あごについているので，次に来るsは純粋にsの発音ができず，ツに近い音になるのは当然なことである。

f, h, j, k, q, r, v, w, ch, sch の前のnも同様で，これらの子音を発音する為には，nを発音している舌の上面を一たん上あごから離さねばならない。この離す時の音が軽くヌと聞える。この他 d, n, t, z 以外の子音の前のnも同様の影響を与えているのであるが，ひどく目立つ程ではない。学習する時には逆に，ガンツ，フェンツター，ヴェレンヌ ラウシェン（Wellen rauschen），マンチェ（manche），メンチェン（menschen），カインヌ ホーフ（kein Hof），アインヌ ヤパーナー（ein Japaner）等と読ませる。するとドイツ語らしく聞える。これとは逆にドイツ人は電車をデンチャ，今晩わ を コンヌバンヌワ，ゲンヌリ（原理），オンツェン（温泉）に近く発音する。

ℓについては，ℓそのものの発音が中々摑みにくいのである。然し私は大変便利な方法を見つけたように思う。それはdの発音のままで，例えばダの発音の形のままでラ，ディのままでリというように発音する。そうすると大変楽にℓa, ℓi, ℓu, ℓe, ℓoが発音され

る。日本語のラリルレロが舌先の裏側を上あごにふれさせて発音するのに比べて，ℓa, ℓi, ℓu, ℓe, ℓo は舌先の上面を上あごにふれさせるのである。alles, Bild, falls 等でℓの発音が正しいかどうかがよく分る。英語のℓとドイツ語のℓは少し違う等というようなことは，この基本的な舌先の上面を上あごにふれさせることができてからのことである。それよりも大切なことは，実はℓの発音には二つあることである。今一つの発音を会得するには先ずℓa, ℓi, ℓu, ℓe, ℓo ができてからである。例えば Bild の Bi のイは舌の両側を上あごの両側に接し舌先を離したままで発音する。次にℓに切りかえるには離れている舌先の上面を上あごにつけ，上あごに接している舌の両側を離さねばならない。この離す時の音が今一つのℓの発音である。このようなℓの発音をせざるを得ないのはeとiのあとであることは bald, Bild, Bulle, Welt, Wolf 等と試してみればすぐに分る。

ℓの次に来る音もnのあとと同様な影響を受ける。それは上記の舌先の上面の動きを考えれば，当然のことである。即ち，als, welche, falsch 等はアルツ，ヴェルチェ，ファルチュに近く発音する。この発音ができていないと，ワタクチ ハ ナーニモ ワカイマチェン（私はなんにも分りません）というような感じを与える。

ℓとrの発音をし分けたり聞き分けることは日本人には苦手である。Laden を Raden, London を Rondon 等と平気で発音していることからもよく分る。そこへ更に英語のr, 日本語のラ行が入って混乱する。子供が片言を言いはじめたとき，上記のどの子音を先に容易に発音するだろうかと観察した。どうもrでも日本語のラ行でもなく，ℓが最初の音のようである。そして親達の話すのを聞き乍ら，だんだんに日本語のラ行やrに変化するようである。赤ちゃんにはダダダの音は出し易いようである。とすればこれに近いℓa, ℓa, ℓaが発音し易いことも想像できる。1，2才の抱っこしている幼児に Hallo といわせると日本の子供も大変きれにに発音する。その時，今にこのℓが子供の生長と共に次第にラ行におき替ってℓの発音が忘れられてゆくのであろうと思う。ドイツ語のrは，フランス語もそうであるが，中々できない。ところが子供は始からできるのである。特に教えられなくても発音している。Backe, backe Kuchen, der Bäcker hat gerufen！というわらべ歌をうたう子供の gerufen の発音は美しい。南ドイツではrを巻舌の発音にする地方もあるので，標準のrの発音をできなくても，どうにか間に会わせることはできる。然しけんよう垂をふるわせて出すrを発音しないと，wird, wirklich, geworden 等，ドイツ語らしい味は大分落ちる。この点ではフランス語も同様でrの発音のできていないフランス語は聞き苦しい。

撥音や重子音の発音も気をつける必要がある。本来ドイツ語には日本語程のはっきりした撥音はない。持って来て下さい，行って来ました等をドイツ人にいわせると，モテキテ下サイ，イテキマシタ となることによって逆に知ることができる。Mutter, Jacke, Butter, Schritt 等をムッター，ヤッケ，ブッター，シュリットというような発音にしないで，むしろムター，ヤケ，ブター，シュリトに近く言うとドイツ語らしくなる。重子音のℓℓ, mm, nn はこれとは反対で無視してはいけない。Wellen, kommen, kennen をヴェレン，コメン，ケネン等と読んで，ドイツ語に馴れたムードを出そうとするのは失敗である。これはあくまで，ヴェルレン，コンメン，ケンネン の方に近いのである。若しもヴェレン，コメン，ケネンとドイツ人が言っているように聞えた時はℓ や m, n を余韻の中で重ねているのである。nを軽くヌと発音したように，余韻を聞きとることができる。

ドイツ語の ü, ö 等も馴れない音で出しにくいが，これらの発音，又その他の文字の発音は学習の時注意が払われているのでここではくり返す必要はない。地方によって ü をイーに，ö をエーに発音するなまりはあるが，上記の子音の発音は どんな人にも，どんな地方においても為されている。それ故に，却って分りきっているようなこれらの子音の発音を正しくしないと，ドイツ語は聞き苦しくなる。